

「講和記念婦人とこども大博覧会」についての考察

川 口 仁 志

1. は じ め に

1951 年（昭和 26 年）9 月、サンフランシスコにおいて講和会議が開催され、翌年 4 月 28 日には講和条約が発効、連合国と日本とのあいだの戦争状態が終結する。これを記念して、1952 年（昭和 27 年）3 月 20 日から 5 月 31 日にかけて、「講和記念婦人とこども大博覧会」（以下「講和記念博」と略称する）が開催された。博覧会の主催者は、大阪市・大阪新聞社・産業経済新聞社であった。

「大阪新聞」は、1922 年（大正 11 年）に「南大阪新聞」として創刊、翌年には「夕刊大阪新聞」と改題され、1942 年（昭和 17 年）に「大阪新聞」となる。「産業経済新聞」の前身である「日本工業新聞」は、夕刊大阪新聞社によって 1933 年（昭和 8 年）に創刊され、のちに愛知県以西の産業経済関係の専門紙 33 社を合併、1942 年（昭和 17 年）に「産業経済新聞」となり、戦後は一般紙に転換、全国紙へと発展していく。

「大阪新聞」と「産業経済新聞」は、いずれも前田^{ひさきち}久吉によって創刊された新聞である。前田は、貧しい農家に生まれたが、新聞販売店の店主から身を起こし、「産経新聞」を朝日・毎日・読売の三大紙に迫る新聞に育て上げ、大阪の新聞王に上り詰めた人物である。大阪新聞社と産業経済新聞社は協力してさまざまなイベントを開催しているが、なかでも「講和記念博」は「人気も観客動員も大成功といわれる」博覧会である¹⁾。

講和を記念する博覧会において、なぜ「婦人」と「こども」がテーマに掲げ

られたのであろうか。「講和記念博」の記念誌は、この博覧会の趣旨について、次のように記している²⁾

講和の春を迎え、新しい日本を民主世界にふさわしい独立国として育くむには、まず私達が婦人も、こどもも、みんなが手をつないで、正しく平和を愛し、産業を復興させ、貿易を振興し、文化を向上させることです。

この国民の願いと決意を、楽しみながら一目で皆様にわかつて戴きたいと、大阪市並びに大阪新聞社、産業経済新聞社は、講和記念“婦人とこども大博覧会”を天王寺、大阪城両公園で開催することになりました。

博覧会の歴史始まって以来の大構想のもと婦人とこどもにもよくわかるように日本の産業、貿易、文化の在り方を立体的に繰り展げ、特に婦人の教養のための、そしてこどもの世界に楽しい夢をあたえるための新しい施設のかずかずを充実させ、再建日本の発展に必ずや貢献することを念願しています。

また、大阪新聞社と産業経済新聞社の社長として「講和記念博」の会長を務めた前田久吉は、その自伝のなかで、博覧会を計画した当時の思いを次のように語っている³⁾

私は長い間の追放生活（前田は戦意高揚報道を理由に、敗戦後、公職から追放されていた：引用者注）から解放され、再び新聞活動に立ち帰ると直ぐ、やがて来る講和と共に新生日本の民主化を促進するため、何か有意義な催しを世に贈りたいと考えていた。民主独立国家として新発足するには、誰も彼も、男も女も、とくに育成の任に当る婦人、将来の日本を担うこども、みんなが手をつなぎ合って、正しく平和を愛し、産業を復興させ、貿易を振興し、文化を向上させる、この目的に向って進むことが肝要であり、それはわれわれ全体の決意であり、願いであるに違いない。この決意と願いを、われわれ

みんなの前に展開し、お互いに反省しお互いに勇気づける企画、こゝから私は講和記念としての婦人とこども大博覧会を思いついたのであった。そしてまた一旦やる以上、博覧会の歴史に未だかつてない大規模な構想の下に、婦人とこどもにもよくわかるよう、日本の産業、貿易、文化の在り方を立体的に繰りひろげ、特に婦人の教養のための、またこどもの世界に楽しい夢を与えるための、新しい施設を充実し、再建日本の将来に何物かを貢献したいと思った。

博覧会のメインテーマが「婦人」と「こども」であったとすれば、そのサブテーマは「経済自立」であった。博覧会開催の必要性について、記念誌には次のように記されている。「どうしても大博覧会を開催して、実際的な商品を展示して、甲、乙、丙の商品の優秀性を選択せしめる必要がある。現に各メーカーの努力は戦前の域をはるかに越して優秀な製品を製作している。これを広く海外にまで認識させ、日本貿易の進展に貢献し、内は国内の円滑なる需供の途を拓き、更らに大阪市を日本の経済的中心に建直して日本経済の堅実な発展を促そうというのが、当博覧会の目的の1つである。」⁴⁾

第二次大戦中は、政府による経済統制により、経済の中心は東京に移動していた。これを戦前の状況に戻し、大阪を再び経済都市として再生させようというのが、この博覧会の目論見であった。1903年（明治36年）、大阪では第五回内国勧業博覧会が開かれているが、この博覧会は、大阪が近代都市へと発展するうえで、大きなきっかけになったといわれる。それから半世紀を経て、再び博覧会を大阪の経済発展の起爆剤にしようと計画されたのが、「講和記念博」だったといえるだろう。

このように「講和記念博」は、戦後の混乱から抜け出し、ようやく復興の明るさが見え出したころ、サンフランシスコ講和条約の発効という機会をとらえて開催された。博覧会のテーマには、新しい日本の未来を託すべき存在である「婦人」と「こども」が選ばれ、博覧会に期待されたのは、開催地となった大

阪の経済発展の契機となることであった。本稿は、この「講和記念博」がどのような背景のもと、いかなる経緯で開催されるに至ったのか、そしてこの博覧会のなかで、「子ども」や「女性」について人々に伝えられたメッセージは何だったのかについて考察しようとするものである。

2. 産経グループの博覧会戦略

大阪新聞社と産業経済新聞社が博覧会の主催者になるのは、「講和記念博」が初めてというわけではない。1933年（昭和8年）に「日本工業新聞」が創刊されると、1934年（昭和9年）には夕刊大阪新聞社と日本工業新聞社の主催で「満蒙大博覧会」が開催され、1935年（昭和10年）には日本工業新聞社の主催で「日本近代工業大博覧会」が、その翌年には「第二回日本工業大博覧会」が開かれている⁵⁾。

1932年（昭和7年）、満州国の建国が宣言され、日満議定書が調印されて、日本の既得権益が承認されると、天然資源の利用と重工業の進出をはかるべき大きな市場として、日本では「満蒙の天地」が注目され、一般の関心を集めるようになっていた。前田は、その現状を国民に紹介し、日本の商工業の発展に寄与すると同時に、この機会を「日本工業新聞」の販売促進に利用しようと考え、大阪城を会場として「満蒙大博覧会」を開催した。伝記によれば、「この時前田は、二人の社員を連れて渡満し、現地の軍方面をかけ廻って熱意を示して展示品を蒐集し、大阪城一帯を会場として満蒙に関するあらゆる資料を陳列し、婦人子供にまでわかるよう目と耳から訴えたのだが、これが時節がら大当たりで、遠く関東・東北・九州方面からも団体客が押しかけるほどの盛況であった。これによって日本工業新聞の声価は一時にして大いに上り、好転のきっかけとなった。」という⁶⁾。

第1回の「日本近代工業大博覧会」は大阪城公園において、第2回は東京上野の不忍池畔において開催された。外国からの視察団の来場も多く、盛況であったという。伝記によれば、「この工業大博覧会は、立派に成功を収め、日本工

業新聞の存在と威力を全国に限なく PR することになったばかりでなく、この時局的意義の大きい催しものを成し遂げた前田に対する全社員の評価と信頼は、のちの前田の大活躍の支えとなり、前田の新聞事業発展の基礎とな」ったという⁷⁾。

創刊まもない「日本工業新聞」は、すぐには販売実績を上げることができず、苦しい経営状態が続いていた。しかし、「満蒙大博覧会」と「日本近代工業大博覧会」による広報宣伝が功を奏し、業界紙としての存在が次第に認められていくようになる。「日本工業新聞」の成功は、これら2つの博覧会によるところが大きいといえることができるだろう。

のちに前田は、新聞社が主催する事業活動について、次のように語っている。「新聞にとって、編集、営業が大切なことは勿論だが、これに劣らず重要なものに、各種の企画事業がある。(中略) こうした数々の事業によつて、読者を動員し、組織し、また新規読者の獲得をも図るのである。(中略) 新聞の発展は、新聞そのものの成績よりも、むしろ企画事業の成功不成功にかかっているといつても過言ではないようだ。朝日、毎日、読売の発展の歴史が、このことを如実に物語っている。』⁸⁾

日露戦争後あたりから激化する新聞の読者獲得競争のなか、朝日・毎日・読売の各新聞社は、販売促進をはかるために各種の事業活動を展開しており、その1つに博覧会があった。時代を読むことに長けていた新聞というメディアは、さまざまな祝賀イベントをとらえ、それを記念する博覧会を企画していた⁹⁾。そうした三大紙の戦略に学んだ前田は、「日本工業新聞」が創刊されたばかりで経営が困難な時期、「満蒙大博覧会」と「日本近代工業大博覧会」という2つの博覧会を企画し、成功を収めたのである。

その後、第二次大戦後のGHQによる統制の時代を経て、再び新聞の販売競争が始まろうとするなか、公職追放を解かれて新聞業に復帰した前田は、読者獲得をはかるための事業活動の一環として、再び博覧会を開くことを思いついた。こうして「講和記念博」が開催されることになるのである。このころから、

前田の率いる産業経済新聞社は、積極的な拡大路線を進んでいく。「講和記念博」が開催された1952年（昭和27年）の夏には「大阪産経会館」が完成、1955年（昭和30年）には「東京産経会館」が完成し、産業経済新聞社は東京への進出をはかっていくのである。

前田の伝記によれば、「前田久吉は博覧会男といってよいほど博覧会が好きであり、これを新聞のPRのためによく使った」という¹⁰⁾。「講和記念博」以降も、大阪新聞社と産業経済新聞社の主催により、さまざまな博覧会が行われることになるが、それぞれに成功をおさめ、「対外的には『博覧会の産経グループ』という名を高めて新聞のイメージアップに貢献し、内部的には大きな収益をあげて社業に寄与した」と評価されている¹¹⁾。

ところで、前田が「博覧会男といってよいほど博覧会が好き」だったのには、彼の少年期の個人的な体験が関係しているように思われる。すでに述べたように、「講和記念博」の半世紀前にあたる1903年（明治36年）、大阪では第五回内国勸業博覧会が開催されているが、前田は地元で開かれたこの博覧会から、大きな影響を受けるのである。前田は自伝のなかで、その時の思い出を次のように語っている¹²⁾。

日露戦役が起る前年だったから、たしか明治三十六年私が十一歳の時だった。茶臼山に近い広大な土地に内国勸業大博覧会が催された。この会場の跡を受けて、大阪市で公園にしたのが今の天王寺公園だが、何しろ当時珍しい大博覧会というので、この界隈が大変な賑わいだった。場所は近いし、近所の友達も晴着に着替えて見物に出かける。毎日友達が誘いに来た。しかし私達兄妹は、母が行っておいでと云ってくれないので、家にじっとしてはいるものの、心は博覧会に飛んでいた。

幾日か経って、さあ今日こそ行って来なさいと、仕立直しの着物のしつけを取って、母は私達に着替えをさせ、父と二人、私達の出てゆくのをいつまでも見送っていた。私達はなんの気もつかず大喜びで、誘いに来た友達と博

覧会に行き、思わず時を過して夕方近く帰って来ると母の姿がどこにも見えない。暮合の縁先きにぼんやりしている父に訊いても答えてくれない。今日の面白かったことを早く聞かせたいと、母を捜して裏口に出た時、もううす暗くなった向うの木の蔭に、こっちへうしろを見せ、しょんぼり立っている母の姿を見つけた。私はハッとして立ちどまった。よく見ると小脇に何か包みを抱えて、なんだか泣いている様子。

思わず飛びついて、おっ母さんと呼ぶ声に驚いて振り返り、急にそむけたその顔に、私は母の涙を見のがさなかった。なんで泣くのだろうと子供心にも不審し、心配にもなって、お使いなら僕行って来ると前に廻ると、母は更に顔をそむけ、お前はうちにいなさいとあわて、行きかゝる。私は一倍気になり、では一緒に行くと母の袖にまつわりつく。すると母は、いつにない厳しい声で、聞き分けのない、と振り切って行ってしまった。後を追うことも出来ず、ぼんやり見送っているうち急に悲しくなり、涙がポロポロこぼれて来た。

しばらくして、子どもであった前田にも、前後の事情が徐々に理解できるようになった。近所の子どもたちが晴れ着で博覧会に出かけて行くなか、わが子に引け目を感じさせたくないと考えた前田の母親は、着物は買えなくても、せめて肌着のひとつぐらひは新しくつくってやりたいと、父親とも相談し、足りない金を借金し、大急ぎで縫いあげ、子どもたちに着せ、博覧会に送り出したのであった。しかし、その日は、借りの金を返すべき約束の期限であった。子どもたちを送り出したあとで両親は、わずかしかない家の物を売って借金を返済しようとした。そのために母親は裏口までは出たものの、木の陰に隠れて泣いていた。それを博覧会から帰って来た息子に見つけられたのであった。

前田は、少年時代のこのような辛い経験から、なんとか貧困から抜け出し、母親に楽をさせてやりたいと考えようになった。第五回内国勸業博覧会の会場となった天王寺公園は、前田にとっては楽しかった博覧会の会場であると同

時に、貧しかった少年時代を思い出させる場所であった。そこを会場のひとつとして、前田は「講和記念博」を開催することになるのである。

3. 戦後の「こども博」ブーム

「講和記念博」開催に至るまでの具体的な経緯を、記念誌の記述から確認しておこう¹³⁾ 前田率いる大阪新聞社と産業経済新聞社は、講和条約発効が予想されるなか、これにふさわしいイベントとして、博覧会の開催を計画していた。この事業の円滑な遂行をはかるため、大阪府・大阪市・商工会議所と折衝していたところ、大阪市教育委員会においても、講和記念事業として博覧会を開く計画があることが判明する。こうして両者の構想が一致したことから、「講和記念婦人とこども大博覧会」と銘打った博覧会が共催で開催されることになるのである。1951年（昭和26年）9月11日付で「大阪新聞」と「産業経済新聞」の紙上において博覧会開催の社告が報じられ、9月20日には大阪市中央公会堂において事務総局開設総会が開かれ、12月1日には地鎮祭と起工式が挙行された。博覧会の名誉総裁には高松宮宣仁親王と高松宮妃喜久子が、総裁には大阪市長の中井光次が、最高顧問には内閣総理大臣の吉田茂が迎えられた。

博覧会は1952年（昭和27年）3月20日に開場、開場式が終わると、待ちかねた大観衆が会場を埋めた。「産業経済新聞」の記事によれば、初日の入場者数は7万人、翌3月21日は休日であったことから、入場者数は14万人にのぼった¹⁴⁾ 博覧会期間中の4月28日には、講和条約発効という「輝かしい日」を迎え、文字通り講和を記念する博覧会となった。会期中の入場者数は300万人、4億円にのぼる経費をかけた、大規模な博覧会であった。

「講和記念博」が開催されたのと同じ時期、日本各地で「子ども」をテーマとする博覧会が開かれていた。この時期の「子ども」を冠した博覧会を列举してみると、1949年（昭和24年）の岐阜の「犬山こども博覧会」、1950年（昭和25年）の兵庫の「婦人子供博覧会」、香川の「高松こども博覧会」、神奈川の「小田原こども文化博覧会」、愛知の「名古屋こども博覧会」、1951年（昭

和 26 年)の兵庫の「児童憲章制定記念宝塚こども博覧会」、岡山の「山陽子供博覧会」、埼玉の「ユネスコ子供博覧会」、東京の「こども博覧会」、1952 年(昭和 27 年)の三重の「世界こども博覧会」、群馬の「新日本高崎こども博覧会」、大阪の「アメリカ子供博覧会」などを挙げるができる¹⁵⁾

「世界こども博覧会」は、三重県上野市の伊賀上野白鳳公園において、1952 年(昭和 27 年)3 月 15 日から 5 月 18 日にかけて開かれた。上野市を主催者とし、講和条約締結と市制 10 周年を記念した博覧会で、科学知識の向上、民主主義の徹底、社会教育および社会道德の確立、国際平和機構への協力などの理想の普及を目的にしたものであった。展示館としては、驚異の科学館・国連平和館・ユネスコ子供館・社会科館・忍術不思議館・世界探検大パノラマ・世界こども芸能館・子供スポーツ館・産業館・郷土館・観光館などが造られ、アトラクションとしては、アルミ文化住宅・テレビと映画館・野外劇場・屋内劇場・子供特設館・動物園・遊技場などに加え、飛行塔・ウォーターシュート・ボートなどの遊具も設置された。1 億円の経費をかけ、会期中の入場者は 30 万人を突破したという¹⁶⁾

「新日本高崎こども博覧会」は、1952 年(昭和 27 年)4 月 1 日から 5 月 20 日にかけて、群馬県高崎市の観音山丘陵において開催された。主催者は高崎市・群馬県・群馬県教育委員会、新日本の発足と国鉄高崎線の電化開通を記念する博覧会で、次の世代を担う子どもの福祉を増進し、その文化的素養を涵養するとともに、観音山一帯を公園として開発し、観光地としての高崎を全国に紹介することが目的であった。アメリカ館・地球館・産業館・教育文化館・テレビジョン館などの展示館のほか、お猿の電車・大型飛行塔・メリーゴーランド・ボブスレッド・動物園などの遊戯施設が設けられ、タイから贈られた象には子どもたちが殺到したという。予算規模は約 4 千万円、会期中の入場者は約 50 万人であった¹⁷⁾

このように、「子ども」に夢を託すという趣旨のもとで、この時期、「子ども」をテーマに掲げた数多くの博覧会が開催された。こうした「こども博」ブーム

ともいえる時代のなか、「講和記念博」は最も大規模な博覧会であったといえることができるだろう。

また、「こども博」に限定せず、当時のさまざまな博覧会と比較しても、その規模は大きなものであった。2年前の1950年（昭和25年）に開催された「日本産業貿易博覧会（神戸博）」や「アメリカ博覧会」が200万人規模であったことを見ても、「講和記念博」は大衆動員に最も成功した博覧会であったといえることができる。

4. 博覧会の会場と展示

「講和記念博」の会場は2つに分かれ、第一会場は天王寺公園、第二会場は大阪城公園に設けられた。前田の外伝を著した清水伸は、これらの博覧会場について、「すべてが前久（前田久吉のこと：引用者注）独自の体験と頭脳から描き出されており、そこに前久ならではの構想と工夫の跡をみつめることができる」とし、「この意味では、前久は大きなレイアウトの天才といってよい、」と記している¹⁸⁾。

第一会場には、飛行塔・ウォーターシュート・大花壇・動物園などの娯楽施設が設けられて人気を集めた。第二次大戦中、天王寺動物園では象・虎・ライオンなどの猛獣が次々と処分され、それ以外の動物も大幅に減少していたが、戦前には及ばないものの、いくらか動物が戻ってきて動物園らしくなり、博覧会に訪れた人々を楽しませた。また、「産業貿易館」では、各業界の新しい技術が紹介され、最新の製品の展示を通じて、日本の産業の現状が展示された。第一会場の「講和記念館」、「婦人館」、「こども館」については、後述することにする。

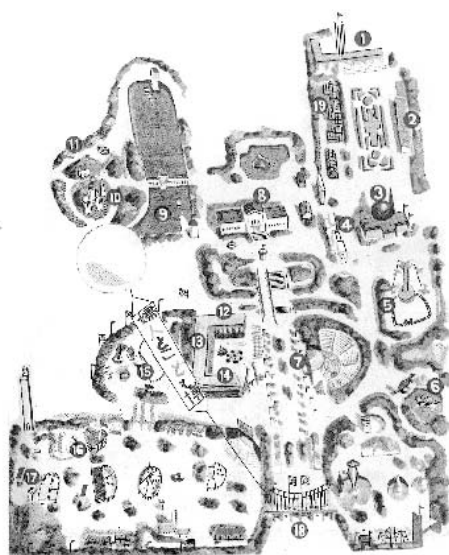
第二会場となった大阪城公園の天守閣には、「観光郷土館」が設けられて人気を呼んだ。「交通館」や「航空館」では、交通・運輸の発達に関する展示が行われ、将来の日本の航空界の発展のための参考資料が並べられた。

これらの展示館に加えて、会場の内外において連日多彩な催しが繰り広げら

れた。街には花電車・花自動車が走り、博覧会に華やかさを添えた。大阪新聞社と産経新聞社が他社にさがけて購入した自社専用のセスナ機とヘリコプターが博覧会場で披露され、間近に見学できるということで、子どもたちの人気を集めた。

会期中の5月17日には「国際少年少女親善大会」という催しが開かれた。アメリカンスクールの子どもたちをはじめ、ドイツ・インド・トルコ・中国・韓国などの子どもたちや、ユネスコ・YMCAのボーイスカウト・ガールスカウトが参加し、国旗で飾られたステージでは、それぞれの国の服装で歌やダンスや芝居が披露された¹⁹⁾

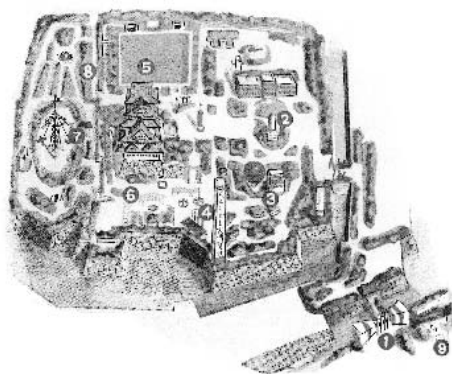
再び第一会場に戻り、この博覧会のテーマを代表すると考えられる、「講和記念館」、「こども館」、「婦人館」の3つの展示館について検討しておこう。



- 1 アベノ橋正面
- 2 土産物売店
- 3 N・H・Kテレビ館
- 4 講和記念館
- 5 飛行塔
- 6 古代動物園
- 7 演芸館
- 8 こども館（美術館）
- 9 ウォーター・シユート
- 10 こども夢の国
- 11 北海道館
- 12 オープン・パノラマ
- 13 産業貿易館
- 14 婦人館
- 15 こども遊園
- 16 メリー・ゴーラウンド
- 17 動物放飼園
- 18 新世界正門
- 19 植物園

図1 「講和記念博」第一会場（天王寺公園）

（出所）『講和記念婦人とこども大博覧会記念誌』産業経済新聞社、大阪新聞社、1952年。



- 1 交通館
- 2 シンボル塔
- 3 特設館
- 4 小演芸館
- 5 観光郷土館
- 6 休憩所
- 7 こどもの国
- 8 大花壇
- 9 航空館

図2 「講和記念博」第二会場（大阪城公園）

（出所）『講和記念婦人とこども大博覧会記念誌』産業経済新聞社，大阪新聞社，1952年。

「講和記念館」は、講和条約発効を記念するこの博覧会において、中心的な展示館であった。この展示館は三つの部分に大別することができる。第一部は講和実現の苦心と日本の独立について、第二部は終戦当初から講和実現の動きが開始されるまで、第三部は国際連合についての展示であった²⁰⁾ 展示物のなかには、「若し大阪に原爆が落ちたら？」というテーマで造られた動くパノラマもあった。

1950年（昭和25年）には朝鮮戦争が始まり、サンフランシスコにおける講和条約締結の際には旧日米安全保障条約が調印されており、冷戦がグローバル化していたこの時期、「講和記念館」の展示は、複雑な国際情勢のなかで講和実現に尽力するアメリカと、それに反対を唱えるソ連という構図を表現したものであった。また、国連についての知識を啓発することも「講和記念館」の大きな目的であり、「世界の恒久平和確立に努力する国連」についての展示がなされ、国連に対する大きな期待が示された。

「こども館」は、「こどもにわかりよく、楽しみながら、その情操教育、科学教育を振興するとともに、こどもの創造的精神を啓発し、芸術的鑑賞力を生か

し、さらに社会科の勉強に参考となるようにというねらいで企画された」という²¹⁾ 正面入口のアルミ製大ロボットの横を通して「こども館」に入ると、百年後の大阪の大パノラマ、地球の歴史を表現したジオラマ、日本教育史のジオラマ、鉄道大パノラマなどの工夫を凝らした展示や、「世界の人形展」、「少女創作人形展」、「世界のこども作品展」などを見ることができた。

「こども館」の「科学室」には、ロケットによる月世界探検のパノラマや、原子力や水素爆弾についての展示が行われた。そこでは、たとえば砂漠の緑化のために原子力をいかに利用するかについての説明などがなされていた。「講和記念館」における原爆に関する展示と対をなして、「こども館」では原子力の平和利用についての展示が行われていたわけである。

「婦人館」の展示は、衣食住を中心とした家政に関するものであった。「今日の日本女性の最も身近な問題は、生活文化を高めるということであるから、衣食住を通じて、生活の改善を促進させるよう努めた」のだという²²⁾ その内容は、衣生活・食生活・住生活・育児と婦人衛生・婦人の地位の5部門に分けられ、衣食住についてはその歴史の変遷が紹介され、今後の在り方が示された。育児と婦人衛生の部門では、当時問題となっていた産児制限や性教育に重点が置かれ、婦人の地位の部門では、未亡人の自活問題や離婚問題について取り上げられた。女性の社会進出を受けて、たとえば「働く女性と職業病」といった展示も見られたが、「婦人館」の展示の多くは家庭生活と育児に関わるものであった。

5. 「子ども」をめぐる言説

「講和記念博」の名誉総裁であった高松宮宣仁親王は、3月20日の開場式における「おことば」のなかで、「こどもたちと、その母親こそ、ほんとうに新しい次の時代をつくり出す一番のホープである」と語った²³⁾

続いて挨拶に立った博覧会総裁の中井光次（大阪市長）は、博覧会の主題は産業と貿易の振興であるとしつつ、博覧会の三つの意図について述べた²⁴⁾ 第

一は「真に新しい民主日本平和再建の担い手であることもたちに、美しい夢と、明るい希望と楽しい遊びを与えたい」ということ、第二は「新しく解放され社会的地位と共に、その責任も高まった日本女性が、これからの生活に、またこどもたちの養育に、貴重な示唆を得る機会を作りたいということ」、第三に「動物園の拡充を始め、講和記念館等博覧会の中心設備を、その時その場限りのものでなく、或は図書館、自然博物館として未長く将来に亘つて市民の文化と厚生の上に役立たしめるよう企画したということであ」る。中井大阪市長の言葉からは、この博覧会の根底にある子ども観・女性観を知ることができる。すなわち、子どもは日本再建の担い手であり、女性はその子どもたちの養育者であるという考え方である。

この子ども観・女性観の問題について確認しておくために、博覧会の開場式に寄せられた祝辞²⁵⁾のなかでどのようなことが語られていたかについて、もう少し検討しておきたい。

祝辞を読んでいると、「こども」に与えるべきものとして、決まって「美しい夢」と「明るい希望」が登場し、「婦人」に与えるべきものとしては、「教養」、「啓蒙」、「啓発」などが挙げられていることがわかる。文部大臣の天野貞祐は、祝辞のなかで次のように述べている。

今や講和の年を迎えて、わが国は新たなる建設の段階に入つたのでありますが、このときにあたつて新日本の明日をになうこどもたち、及びその母たちの教育に資するため、本市の中心地帯ともいふべき天王寺及び大阪城公園の両地を選んで、講和記念“婦人とこども大博覧会”の開催されますことは、まことに時と、ところとを得たものと申さなければなりません。ことに、その企画において、母の教養を高め育児に関する多くの示唆を与える一方、情趣豊かな多くの施設を通して、少年の知識をひろめるとともに、こどもの世界に美しい夢と、明るい希望を与えようとするなど、主催者の周到な用意がうかがわれますことは、教育上に利するところの大なるはいうまでもな

く、ひろく市民のレクリエーションとしても、その意義は高く評価されてよいと思います。

また、郵政大臣であり電気通信大臣であった佐藤栄作は、博覧会について、「あらゆる婦人の啓発と、また児童に対しては輝かしい将来の夢と希望を与えるもの」であると述べている。国務大臣の大橋武夫は、博覧会は「あらゆる婦人の啓蒙と、また次代を背負う児童に対し、輝かしい希望と美しい夢とを与えるもの」だと述べ、国務大臣の山崎猛は、博覧会は「婦人啓発と児童に明るい希望を与えるため」に企画されたと述べている。

法務総裁の木村篤太郎は、「新憲法下、婦人とこどもの立場は、法律上いちじるしく向上いたしました。が、社会の実情はいまだ旧態依然たる面もあり、いわゆる女子供の地位は必ずしも十分に保護されておらず、人権擁護思想の普及が一段と要望されております」と述べている。運輸大臣の村上義一もまた、「民主国家の発展は人々の半数を占める婦人の地位の向上にあり」、「戦後、憲法をはじめ、いろいろの法律、制度によつてこれが改善」されてきたが、「まだまだ十分とは申せない」と述べている。新しい憲法のもと、女性には参政権をはじめとするさまざまな権利が保障され、「男女同権」の時代を迎えることになるが、それは法律上や制度上のことであって、実際の女性や子どもの地位は、充分には改善されていないという認識があったことがわかる。

それでは、ここで語られている女性の地位向上とは、政治や社会に参加する権利を保障していくことだったのだろうか。「婦人館」の展示や祝辞の言葉などを見る限り、そうした権利に重点は置かれていなかったといわざるをえない。労働大臣の吉武恵一は、「今のこどもを健全な国民に育成することに努力し、また、こどもの育成に直接大きな貢献をする母の地位を向上し、その教養を高めることこそ、日本の将来を明るくするための前提であると」述べている。また、建設大臣の野田卯一は、今後の国家の発展のためには「次の時代を担うこども達に期待する所が多く、これを育てる母親の責務はまことに重大」であ

るので、「新生日本の若芽であるこども達を正しく豊かに育てなければな」らず、「直接子供達に愛育の手をのべる母親の健康と教養が、日本の進路に重要な関連を持つ」と述べている。大阪市婦人団体協議会代表の佐藤よし子は、「独立国としての新らしい第1歩をふみ出す明るい希望に輝いて居りますとき、私たち婦人の力は大いに期待されるところと確信致します、殊に次の時代を背負うて立つ『こども』の教育に母としての責務は非常に重いものとの感を深くするものでございます。」と述べているのである。

この博覧会は「講和記念婦人とかども大博覧会」と銘打ち、「婦人」と「こども」が2つの大きなテーマとして掲げられた。しかし、この2つのテーマは「こども」という1つのテーマに収斂するといえることができる。なぜなら、この国の未来を託すべきは「こども」であり、その育児を担うのが「婦人」であるというのが、博覧会の主張だったからである。博覧会のなかで語られる「婦人」とは、常に「母」のことであり、「婦人」は子育てに直接携わる者として、子どもを健全に育てるという責務を負い、そのことを通して国家や社会に貢献することができる存在として認識されていたのである。

6. お わ り に

占領軍の支配下にあった苦難の時代を経て、ようやく独立国として再出発できるという明るい時代のムードのなか、「講和記念博」は開催された。戦前から博覧会を巧みに利用して新聞経営に成功してきた前田久吉は、講和条約の締結・発効という時代の転換点をとらえ、この時代の祝賀ムードを利用し、博覧会を仕掛けることによって、新聞のイメージアップをはかろうとした。

講和条約の発効という出来事は、未曾有の困難を乗り越えた日本国民がようやくたどりついた、新しい日本の出発点であった。敗戦という大きな挫折を味わった大人たちは、日本が独立国としての新たな歩みを始めるにあたって、子どもたちに「夢」と「希望」を託した。そして女性たちは、その子どもたちを健全に育てるという役割を改めて担われることになった。

「講和記念博」の内容を検討してみると、このような時代の雰囲気がよく伝わってくる。博覧会を通して子どもに期待されたのは、科学や芸術を学び、それを平和国家日本の建設のために役立てていくことであった。原子力は平和利用され、国連は世界平和を実現してくれるであろう。そうした明るい未来を託されたのが、子どもたちであった。大人たちにとっては、子どもこそ「夢」であり「希望」であり「未来」だったのである。

注

- 1) 大阪新聞社『大阪新聞 75 周年記念誌』大阪新聞社、1997 年、74 頁。
- 2) 前田富次郎編『講和記念婦人とこども大博覧会記念誌』産業経済新聞社、大阪新聞社、1952 年、54 頁。
- 3) 前田久吉『新聞生活四十年 日々これ勝負』創元社、1953 年、195 頁。
- 4) 前掲『講和記念婦人とこども大博覧会記念誌』55 頁。
- 5) 前掲『大阪新聞 75 周年記念誌』139～140 頁。
- 6) 前田久吉傳編纂委員会『前田久吉傳』日本電波塔株式会社、1980 年、136 頁。
- 7) 同上書、139 頁。
- 8) 前田久吉「産経かくて東京へ進出す」『中央公論』第 70 年第 5 号、1955 年 4 月、196～143 頁。
- 9) 1926 年（大正 15 年）、東京日日新聞社と大阪毎日新聞社によって、東京と京都において開催された「皇孫御誕生記念こども博覧会」も、そうした新聞社主催の博覧会のひとつであった。拙稿「『皇孫御誕生記念こども博覧会』についての考察」『松山大学論集』第 17 巻第 6 号、2006 年 2 月、81～101 頁。
- 10) 前掲『前田久吉傳』260 頁。
- 11) 前掲『大阪新聞 75 周年記念誌』75 頁。
- 12) 前掲『新聞生活四十年 日々これ勝負』14～15 頁。
- 13) 前掲『講和記念婦人とこども大博覧会記念誌』57～59 頁。
- 14) 『産業経済新聞』1952 年 3 月 21 日、3 月 22 日、6 月 1 日。
- 15) 寺下勲『博覧会強記』エキスプラン、1987 年。
- 16) 「世界こども博覧会案内書」、「会期六十五日間世界子供博終幕」『三重合同新聞』1952 年 5 月 21 日。
- 17) 高崎市市史編さん委員会編『新編 高崎市史 資料編 11 近代・現代Ⅲ』高崎市、2000 年、36 頁、522～535 頁。
- 18) 清水伸『前久外伝 新聞配達から東京タワーへ』誠文図書、1982 年、203 頁。

- 19) 前掲『講和記念婦人とこども大博覧会記念誌』177頁。
- 20) 同上書, 139～143頁。
- 21) 同上書, 155～162頁。
- 22) 同上書, 146～149頁。
- 23) 同上書, 73頁。
- 24) 同上書, 74頁。
- 25) 同上書, 77～90頁。「各界からの賛辞 母と子の教育に貢献」『産業経済新聞』1952年3月21日。

付記 本稿は平成16年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。